函館学 2011

キャンパス・コンソーシアム函館
合同公開講座

函館学 2011

第5回講座
講義資料

箱館の音
— 歴史を彩った箱館の音色さまざま —

佐々木 茂　函館短期大学 教授

日時：平成 23 年 10 月 22 日（土）午後 2:00 ～ 3:30
会場：ホテル法華クラブ函館

主催：キャンパス・コンソーシアム函館

講師略歴

佐々木 茂 氏（ささき しげる） 函館短期大学 教授

国立音楽大学作曲学科卒業。作曲家として「詩と音楽の会」に所属し、新しい日本歌曲の創作活動を続ける一方、混声合唱組曲「江差」、奥尻島へのレクイエム「憶えていてください」、オペラ「千軒の悲歌」、函館子供の歌「海です」、函館中学生の歌「明日があるから」、NHK函館放送局開局70周年記念［道南ふるさとマイソングーふるさとのにおいー］等、地域に関わる多数の作品を手がける。

また、CD[函館のオルガン]の制作、先般行われた「元町教会めぐり」のコーディネーターを務めるなど多方面で活躍。現在、北海道教育大学名誉教授、函館短期大学教授。

「箱館の音」

はじめに

本日扱う「函館の音」とは「函館の歴史を彩った音楽」のことである。

ペリー艦隊の来航あるいは函館戦争の資料の中に音楽が関係する絵や記述が残されている。それは幕末・明治期における日本人が受容した最初の西洋音楽であった。それがどのような音楽であったのか、近年の調査研究で次第に明らかになってきた。とりわけ 1993 年に函館で開催された音楽図書館協議会主催の「洋学史再考・洋学発祥の地としての函館」及び 2001 年函館日米協会主催の「ペリー提督が運んできた音楽」という 2 つのセミナーは幕末から明治初期の洋学受容史研究において極めて重要な位置づけをもつに至った。前者では文部省による唱歌教育に先駆けてロシア正教の聖歌が民衆によって歌われ日本列島を南下していったことなどにより近代日本の洋学発祥の地を函館とする説が検証され、後者では黒船来航によって日本にもたらされた音楽、とりわけフォスターの最新流行歌曲がリアルタイムで日本に運ばれていたことなどが明らかにされたのである。

本日はそれら 2 つのセミナーにおいて発表された資料の中から函館に関係する部分を取り出し、幕末・明治初期の「箱館町民」が聴いた西洋音楽の音を実際に再現しながら紹介したい。

1. 縄文の石笛

幕末に入る前にどうしても避けて通れない「函館の音」がある。

函館市立博物館にある縄文時代の石笛である。この笛は日本民俗音楽史のうえで非常に重要な位置づけを持っている。函館博物館に楽器の調査で訪れた黒沢隆朝氏は、この石笛を昭和 31 年発行の「楽器の歴史」（音楽の友社）の中で図解とともに紹介した。その後、函館出身の作曲家、廣瀬量平氏が再調査（昭和 48 年頃)し、それがメディアを通して全国に紹介された。それがきっかけとなり全国に眠っている多数の石笛に光が当たることになった。その後、廣瀬は縄文の石笛は能管の源流ではないかと言う説を唱え、現在それが通説となっている。

2. ペリーが運んできた音楽

1853 年浦賀沖に姿を現したペリー率いる日本遠征艦隊は幕藩体制の崩壊のきっかけを作り出した。それは同時に日本と西洋音楽との新たな接触生み出す出来事であった。翌年視察に訪れた函館でも音楽を響かせた。日曜礼拝時に演奏されたのは浦賀や横浜で歌われた記録のある賛美歌旧 100 番であろう。箱館町民は風に乗って聞こえてくるそれらの音を聴いたに違いない。また、乗組員 2 名の葬列に鳴らされた笛と太鼓の行進曲はヘンデルのオラトリオ「サウル」であった。箱館町民が間近で耳にしたのはヘンデルの音楽だったのである。さらに松前藩の用人たちが艦上に招かれて饗応を受けた際のミンストラル・ショーのプログラムが残っている。演奏された曲の中にフォスター作曲の「主人は冷たい土の下

に」が載っている。米国で大人気のフォスターの曲がリアルタイムで日本に運ばれたことがわかる。函館の近代洋学史はここに始まったといってよい。

３．榎本軍の喇叭

1867 年徳川幕府は外国からの脅威に備えるためフランスから軍事顧問団を招き教練を開始した。総勢 16 名からなる第一次軍事顧問団（明治新政府に引き継がれ明治 17 年まで続く）の中に函館戦争で有名なブリュネ大尉がいる。軍事に欠かせないのが信号喇叭である。第一期伝習生 32 名を選び喇叭の訓練を始めたが、この人たちがオタマジャクシで音楽教育を受けた最初の日本人である。その中には後に榎本軍に参加した喇叭手が含まれていたと思われる。榎本軍は鼓笛隊と相当数の喇叭手を擁していたのである。そのとき使用されたラッパ教本が存在している。

４．ハリストス正教会の合唱

中村理平氏によると 1871 年（明治 4 年）の時点で日本人の合唱隊が聖歌を日本語で歌っていたのは間違いないとしている。それまで最初の賛美歌は 1872 に横浜で行われたプロテスタントの宣教師会議で日本語への試訳を歌った 2 曲が始まりとされていた。函館が一年程早かったのである。

ロシア正教は伴奏をつけないア・カペラが伝統であることから音楽教育に力を入れていました。司祭を補佐し音楽を司る役職（読経者）の人が必ず付いています。函館のロシア人墓地に眠っているサルトフさんや、その後任のチハイさんなどの指導により明治 7，8 年頃には日本人による 4 部合唱が歌われていたと思われます。音楽取調掛が設置されたのが明治 12 年、学校で唱歌教育が開始されたのは明治 15 年ですから驚くべきことです。このことをもって平成 5 年に函館で開催された「洋学史再考」と言うセミナーで「洋学発祥の地としての函館」が宣言され、合唱界では函館を「混声合唱発祥の地」としている。